

琉球大学学術リポジトリ

短期大学生の進路に関する研究：
働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 等, 高良, 美樹, 金城, 亮, 廣瀬, 真喜子, Hirose, Hitoshi, Takara, Miki, Kinjo, Akira, Hirose, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2131

短期大学生の進路に関する研究

－働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響－

廣瀬 等*・高良美樹**・金城 亮***・廣瀬真喜子****

Influence of the Model of Worker on Career Maturity of Junior College Students

Hitoshi HIROSE, Miki TAKARA, Akira KINJO, Makiko HIROSE

要 約

働く人のモデルの有無が短期大学生の進路に及ぼす影響を明らかにするため、保育士、幼稚園教諭を目指す学科に所属する短期大学2年生を調査対象者として検討した。その結果、1) 半数近くの学生が入学前後で働く人のモデルをもち、働く人との間柄は「教師」、職業は「保育士」が多い、2) 大学入学前に働く人のモデルが存在した場合、より専門志向の理由で入学し、大学進学理由では「教師」に影響を受けた学生が多い、3) 大学入学後に働く人のモデルが存在した場合、自分自身のみならず、社会にも目を向けた仕事をする理由であり、その理由の形成では「父親」に影響を受けた学生が多い、4) 卒業後の進路(進路目標の決定状況→過去一年間の準備・活動の有無→現状)では、入学前後で働く人のモデルが存在する場合、「準備・活動」に積極的な影響があった。ただし、準備・活動の具体的な内容は、比較的初期の準備・活動に留まっており、そのことから実際の就職の内定には結びついていないとも考えられた。5) 入学前後で働く人のモデルが存在する場合、職業レディネスが高く、卒業後の進路を考慮して大学・学科を選択しており、また、大学・学科の講義・演習科目の内容が役立ったと評価していた。

背景と目的

金城・高良・廣瀬(2004)では、大学・短大の最終学年の学生のうち、将来の進路目標を決定している者と、目標が拡散して選べない者、目標自体が未定の者の3者間で、職業選択の基準の重視傾向や職業レディネス、自己効力感の差異を比較検討した。卒業後の進路に関しては、(1)進路目標の決定状況(決定・拡散・未定)、(2)過去1年間の準備・活動の有無、(3)現状(第1希望内定決定・内定連絡待ち・内定未決定)を段階的に問う一連の質問群を設定して検討した。分析の結果、進路目標を決定している者のうち、33.8%が第1希望に内定しており、内定待ちを合わせると43.8%が卒業後の進路について目途を立てていたが、拡散群と未定群は卒業後の進路が確

定しない者の割合が89.3%(拡散群)、94.1%(未定群)といずれも非常に高く、進路目標を明確に決めないまま就職活動などを行っても、それが内定獲得などの成果には結びつきにくいことが示唆された。

また、高良・金城・廣瀬(2004a)は、金城他(2004)を受けて、働く人のモデルの有無が進路目標の設定に及ぼす効果、進路目標の決定状況の違いが職業選択基準等に及ぼす影響について検討した。分析の結果、働く人のモデルがあると答えた者の6割以上が進路決定を行っており、働く人のモデルが無いと答えた者の進路決定は4割強と大きな開きがあった。このことから、進路目標を決定する上で、働く人のモデルをもつことの重要性が示唆された。また、進路目標を決定できた者は、

*琉球大学教育学部 **琉球大学法文学部 ***名城大学国際学部 ****琉球大学非常勤講師

仕事内容そのものを重視し、仕事を自らの成長や挑戦の機会ととらえているが、進路が未定にとどまった者は、仕事に付随する雇用条件を重視していることが明らかになった。また、職業レディネス、自己効力感については、いずれも特に進路目標の未定群において得点が低いことが示された。

金城他(2004)および高良他(2004a)の結果から、就職のための内定獲得などの成果を達成するためには進路目標を決定する必要性があり、進路目標を決定する上では、働く人のモデルをもつことの重要性が示唆されたともいえる。このような重要性をもつ働く人のモデルであるが、これまでの研究ではあまり検討がなされてこなかったといえる。そこで、本研究では働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響を詳細に検討することにする。

ところで、金城他(2004)および高良他(2004b)の一連の研究では調査対象者として、4年制大学生・短期大学生、男・女、さらに、廣瀬・高良・金城(2004)で示された単一型(免許取得を目的とし、カリキュラムもそれに向けて組まれている学部・学科)・多様型(それ以外の学部・学科)など、様々な特徴を持つ人々を含めていた。これは、より一般性のある結果を求めるために用いた方法であった。一方、就職や進学はその学部・学科等によってそれぞれ特徴があると考えられ、働く人のモデルの有無が進路に及ぼす影響を調査するためには、できるだけ均一な集団において小さな違いも含めてより詳細に検討する方法も考えられる。この場合、一般性のある結論付けは難しいが、その環境における詳細な検討が可能となる。そして、本研究では後者の観点から、「単一型」の短期大学生(女性)に調査対象者を絞り、調査を行うことにする。

なお、本研究では、働く人のモデルについて新たに、入学前の働く人のモデルの存在についても調査することにする。そして、入学前の働く人のモデルの有無と大学進学理由との関係、入学後の働く人のモデルの有無と仕事をする理由との関係などを明らかにする。働く人のモデルが進路に影響を及ぼすならば、入学前には大学進学理由と、入学後は仕事をする理由に関連があるだろうと思われるからである。例えば、淵上(1984a, 1984b)は、高校生の大学志望動機と動機形成に及ぼす人

的影響源の関係を検討しており、それらの結果との関連も考察していく。また、小川・田中(1980)は、親の職業を中・高校生の娘に継承期待することによって、娘がその職業を継承することを希望するようになることを示し、田中・小川(1982)は、親の生き方に対する大学生の娘たちの承認は、親への職業的同一視を生み出す基盤になる可能性を指摘している。これらの結果は、親が子どもにとっての働く人のモデルとして認識されることにより、子どもの仕事をする理由に強い影響を与えていることを示しているとも考えられる。

さらに、本研究では、入学前と入学後の働く人のモデルの存在を調査することから、(1)入学前後に働く人のモデルが存在する学生、(2)入学前には働く人のモデルが存在したが、入学後は働く人のモデルが存在しない学生、(3)入学前には働く人のモデルが存在しなかったが、入学後は働く人のモデルが存在する学生、(4)入学前後に働く人のモデルが存在しない学生に群分けをして、金城他(2004)で実施された卒業後の進路に関する一連の質問群(進路目標の決定状況→過去1年間の準備・活動の有無→現状)や職業レディネス、自己効力感など進路に関する諸尺度との関連を詳細に検討することにする。

方 法

調査対象者：保育士、幼稚園教諭を目指す学科に所属する短期大学2年生(最終学年)、女性107名であった。なお、欠損値のあるケースがあるため、分析によって対象者数が異なる場合がある。

質問項目：1) 大学進学理由：桜井(1991)および文部省(1996)の調査項目を参考に廣瀬他(2004)が作成した項目を基礎として、大学進学理由について「専門的な知識や技術を身につけたかったから」「自分が本当にしたいことを見つけたかったから」「自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから」などを含む10項目を作成した。評定は、「まったくあてはまらない」(1点)～「非常にあてはまる」(5点)の5件法とした。

2) 進学にあたって大学入学前に影響を受けた人：進学にあたって大学入学前に影響を受けた人を「教師」「父親」「母親」「友人」「小説やドラマなどの登場人物」などから1つ選択させた。

3) 大学入学前の働く人のモデル：大学入学前の「将来こんなふうになりたい」という「働く人のモデル」の有無を選択させた。働く人のモデルがあった場合は、働く人との間柄(「教師」「父親」「母親」「兄弟・姉妹」「親戚」など)、働く人の職業(「保育士」「幼稚園教諭」「公務員」「一般企業」など)をそれぞれ選択肢から選択させた。

4) 仕事をする理由：高良・金城・廣瀬(2003; 2004b)で用いられた、仕事をする理由について「達成感を得るため」「自分の能力や創造性を発揮するため」「趣味や興味を仕事で実現するため」などを含む9項目であった。ただし、高良他(2003; 2004b)ではそれぞれの項目に当てはまるか否かを求め、あてはまるものすべてに○印をつける方法で実施されたが、本調査では、それぞれの項目について「まったくあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(5点)の5件法で回答を求める方法とした。

5) 仕事をする理由の形成において影響を受けた人：仕事をする理由の形成において影響を受けた人を「教師」「父親」「母親」「友人」「小説やドラマなどの登場人物」などから1つ選択させた。

6) 大学入学後の働く人のモデル：大学入学後の「将来こんなふうになりたい」という「働く人のモデル」の有無を選択させた。働く人のモデルがあった場合は、働く人との間柄(「教師」「父親」「母親」「兄弟・姉妹」「親戚」など)、働く人の職業(「保育士」「幼稚園教諭」「公務員」「一般企業」など)をそれぞれ選択肢から選択させた。

7) 職業レディネス尺度：若林・後藤・鹿内(1983)の職業レディネス尺度を参考に作成し、大学生を対象に実施した結果(高良・金城, 2001)に基づき、代表的な5項目を選定した高良他(2004b)で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやっていく」「自分の選んだ職業を通じて、自分にどれだけ力があるのか確かめてみることに、大きな関心をもって」などを含む5項目であった。評定は、「まったくあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(4点)の4件法とした。

8) 進路選択に対する自己効力感尺度：浦上(1995)を参考に作成し、大学生を対象に実施した

結果(高良・金城, 2001)に基づき、代表的な5項目を選定した高良他(2004b)で用いられた尺度を使用した。項目は、「自分の将来設計にあった職業を探ること」「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」などを含む5項目であった。評定は、「まったく自信がない(1点)～非常に自信がある(4点)の4件法とした。

9) 卒業後の進路：金城他(2004)で用いられた質問項目が用いられた。卒業後の進路に関して、①進路目標の決定状況(決定・拡散・未定)、②過去1年間の準備・活動の有無、③現状(第1希望内定、内定連絡待ち・内定未決定)を段階的に問う一連の質問群から設定されていた。

その他、調査対象者の年齢や性別のような個人属性、大学での学生生活の満足度、大学・学科に対する総合的な満足度、アルバイト経験の有無、来年の生活費の心配、家計を助ける必要性、就職を世話してくれる人の有無、大学生活で最も打ち込んだことといった付加的な質問項目を加えた(詳細については、付録を参照)。

調査時期：2005年1月25日に調査を実施した。

結果と考察

1. 働く人のモデルの有無

働く人のモデルが入学前、および後に存在するかについては、1) 入学前にも入学後にも存在する(以後、「入学前後有」と称する)が52名(48.6%)、2) 入学前には存在したが、入学後は存在しない(以後、「入学前有・後無」と称する)が9名(8.4%)、3) 入学前には存在しなかったが、入学後存在する(以後、「入学前無・後有」と称する)が29名(27.1%)、4) 入学前にも入学後にも存在しない(以後、「入学前後無」と称する)が17名(15.9%)であった。働く人のモデルが存在すると回答した場合の働く人との間柄は、入学前、入学後とも「教師」が最も多かった(入学前:35.0%、入学後:46.3%)が、2位は入学前では母親(16.7%)、入学後は学校の先輩(11.3%)であった。働く人の職業としては、入学前、入学後とも「保育士」が最も多かった(入学前:46.3%、入学後:38.3%)が、2位は入学前では公務員(18.3%)、入学後は幼稚園教諭(23.5%)であった。

これらの結果から、半数近くの学生が入学前に

働く人のモデルが存在し、その内の半数近くが保育士を働く人のモデルとしていたことがわかった。これらの学生は、具体的な働く人のモデルを持ち、明確な目標を持って入学してきたと考えられる。入学後は、働く人の職業は保育士とともに幼稚園教諭も増えており、学校での実習等の影響によるものであると考えられる。働く人との間柄は、「教師」が最も多く、これは働く人のモデルが「保育士」や「幼稚園教諭」が多かったことと関連があるといえる。2位が入学前では母親であり、入学後は学校の先輩であったことは特徴的である。入学前には働く人のモデルとして、身近な存在である母親が重要な存在であったと考えられ、入学後は自分と近い存在となった大学の先輩が重要な存在として意識されるようになったと考えられる。

2. 大学入学前の働く人のモデルの有無と大学進学理由・影響を受けた人との関連

大学進学理由の10項目について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行ったところ、固有値1.0以上で3因子解が得られ、回転後の説

明率は43.5%となった(表1)。因子Ⅰは「10 まだ就職したくなかったから」「9 大学に進学するのは当然だと思っていたから」「4 まわりのみんなが大学に進学したから」「5 大学の学生生活を楽しみたかったから」「6 大学に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから」の5項目から構成されており、「モラトリアム志向」因子とした。因子Ⅱは「1 専門的な知識や技術を身につけたかったから」「2 自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから」の2項目から構成されており、「専門志向」因子とした。因子Ⅲは「8 家族がすすめたから」「7 先生がすすめたから」「3 大学を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから」の3項目から構成されており、「学歴志向」因子とした。これらの因子のまとめりは、廣瀬他(2004)とほぼ同様なものであったといえる。 α 係数は、因子Ⅰから順に、.71、.74、.58であった。

続いて、大学入学前の働く人のモデルの有無で大学進学理由の内容が違ってくるかどうかを検討するために、各因子ごとに、入学前の働く人のモデルの有無群それぞれの平均評定値を算出し、t検定を

表1 大学進学理由尺度の因子分析結果

項 目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
10 まだ就職したくなかったから	.643	-.292	.167	.526
9 大学に進学するのは当然だと思っていたから	.575	-.006	.245	.390
4 まわりのみんなが大学に進学したから	.559	-.096	-.026	.322
5 大学の学生生活を楽しみたかったから	.527	.252	.182	.375
6 大学に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから	.437	-.162	.357	.345
1 専門的な知識や技術を身につけたかったから	-.004	.815	-.070	.671
2 自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから	-.104	.778	-.056	.619
8 家族がすすめたから	.108	-.307	.634	.508
7 先生がすすめたから	.057	.058	.526	.283
3 大学を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから	.220	-.009	.511	.309
因子寄与	1.601	1.551	1.197	
因子寄与率(%)	16.005	15.513	11.967	

行った。その結果、「専門志向」因子において有意な差($t(104)=1.88, p<.05$)が認められた。働く人のモデル有群の平均は4.7、SDは0.5、働く人のモデル無群の平均は4.5、SDは0.8であった。「モラトリアム志向」因子($t(102)=-0.15, n.s.$)、および「学歴志向」因子($t(104)=0.47, n.s.$)には有意な差は認められなかった。なお、「モラトリアム志向」因子の働く人のモデル有群の平均は2.7、SDは0.9、働く人のモデル無群の平均は2.8、SDは0.8であり、「学歴志向」因子の働く人のモデル有群の平均は2.9、SDは0.9、働く人のモデル無群の平均は2.8、SDは0.8であった。

これらの結果から、まず、「専門志向」の平均値が両群とも4(ややあてはまる)以上であったことから、全体的に専門を志向して大学に入学してきたといえる。なお、専門志向については、両群の評定平均値の差が有意なことから、大学入学前に働く人のモデルが存在した学生は、より専門志向の理由で入学してきたといえる。「モラトリアム志向」と「学歴志向」は、どの条件とも平均値が3(どちらともいえない)未満であり、全体的にそれらの志向を持っていない方向であったといえるだろう。

さらに、大学進学の原因が形成されるまでに主に影響を受けた人(選択肢から1つ選択)について、働く人のモデル有群と働く人のモデル無群の間で χ^2 検定を行ったところ、人数比率の違いが有意($\chi^2(5)=18.46, p<.01$)であり、残差分析の結果、1%水準で「教師」(働く人のモデル有>働く人のモデル無)と「友人」(働く人のモデル無>働く人のモデル有)において両群の差が認められた。つまり、入学前に働く人のモデルが存在した場合、大学進学の原因が形成されるまでに教師に影響を受けた学生が多く、入学前に働く人のモデルが存在しなかった場合は、大学進学の原因が形成されるまでに友人に影響を受けた学生が多かったといえる。淵上(1984a; 1984b)は、高校生の大学志望動機と動機形成に及ぼす人的影響源の関係を検討し、目的意識をもって高校生が進学意志決定をする場合には特に教師の影響力が強いこと明らかにしている。本調査の結果と関連づけて考えると、働く人のモデルが存在する場合、より目的意識をもって進学意志決定をしていたとも考えられる。

働く人のモデルが存在しない場合は、友人との関係で進学したと考えられ、相対的には進学に対する目的意識は低いものであった可能性がある。

3. 大学入学後の働く人のモデルの有無と仕事を理由・影響を受けた人との関連

仕事を理由9項目について、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロット・寄与率の減衰などにより因子数は3に決定された(表2)。因子Ⅰは「7 社会の一員として認められるため」「6 地域や社会に貢献するため」の2項目から構成されており、「社会志向」因子とした。因子Ⅱは「2 自分の能力や創造性を発揮するため」「1 達成感を得るため」「3 趣味や興味を仕事で実現するため」の3項目から構成されており、「向上志向」因子とした。因子Ⅲは「4 余暇や趣味に使うお金の得るため」「8 自分自身や家族の生活の糧を得るため」「5 職場の人々や顧客との交流のため」「9 働かないのは世間体が悪い」の4項目から構成されており、「現実志向」因子とした。因子間相関は、因子Ⅰと因子Ⅱ間が.190、因子Ⅰと因子Ⅲ間が.249、因子Ⅱと因子Ⅲ間.322であった。 α 係数は、因子Ⅰから順に、.58、.62、.62であった。

続いて、入学後の働く人のモデルの有無で仕事を理由の内容が違おうかどうかを検討するために、各因子ごとに、入学後の働く人のモデルの有無群それぞれの平均評定値を算出し、 t 検定を行った。その結果、「社会志向」因子において有意な差($t(104)=3.00, p<.01$)が認められた。働く人のモデル有群の平均値は3.8、SDは0.7、働く人のモデル無群の平均は3.3、SDは0.8であった。「向上志向」因子($t(104)=1.32, n.s.$)、および「現実志向」因子($t(103)=0.72, n.s.$)には有意な差は認められなかった。なお、「向上志向」因子の働く人のモデル有群の平均値は3.7、SDは0.7、働く人のモデル無群の平均は3.5、SDは0.7であり、「現実志向」因子の働く人のモデル有群の平均値は3.4、SDは0.8、働く人のモデル無群の平均は3.3、SDは0.6であった。

これらの結果から、まず、すべての平均値が3(どちらともいえない)以上であり、全体的に「社会志向」「向上志向」「現実志向」を持っている方向で

表2 仕事をする理由尺度の因子分析結果

項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	共通性
7 社会の一員として認められるため	.999	-.002	.000	.999
6 地域や社会に貢献するため	.411	.294	.179	.288
2 自分能力や創造性を発揮するため	.165	.946	-.031	.922
1 達成感を得るため	.250	.487	.114	.312
3 趣味や興味を仕事で実現するため	.023	.396	.251	.220
4 余暇や趣味に使うお金を得るため	.144	.029	.661	.458
8 自分自身や家族の生活の糧を得るため	.214	-.070	.559	.363
5 職場の人々や顧客との交流のため	.155	.178	.501	.307
9 働かないのは世間体が悪い	.328	-.004	.367	.242
因子寄与	1.676	1.567	1.497	

あったといえるだろう。なお、社会志向については、両群の評定平均値の差が有意なことから、大学入学後に働く人のモデルが存在する学生は、より社会志向を持っているといえる。「向上志向」「現実志向」は項目の内容から「自分自身のために働く」という意味合いが強く、「社会志向」は「社会の一員として働く」という意味合いが強い。働く人のモデルが存在することにより、自分自身のみならず、社会にも目を向けた仕事をする理由となることを示すものと考えられる。

さらに、仕事をする理由が形成されるまでに主に影響を受けた人(選択肢から1つ選択)について、働く人のモデル有群と働く人のモデル無群の間で χ^2 検定を行ったところ、人数比率の違いが有意($\chi^2(5)=14.00, p<.05$)であり、残差分析の結果、1%水準で「影響を受けた人はいない」(働く人のモデル無>働く人のモデル有)、5%水準で「父親」(働く人のモデル有>働く人のモデル無)において両群の差が認められた。つまり、入学後に働く人のモデルが存在する場合、仕事をする理由が形成されるまでに父親に影響を受けた学生が多く、入学後に働く人のモデルが存在しなかった場合は、仕事する理由の形成に際して影響を受けた人はいなかったといえる。この結果は、働く人のモ

デルが存在しない学生に比べて、働く人のモデルが存在する学生は将来の職業が明確にイメージでき、家庭でも将来の職業についての話し合いも行われ、必然的に父親とのコミュニケーションも多く、その影響を受け、仕事する理由も「社会志向」の高まりなど、より成熟したなものとなっている可能性が考えられる。一方、働く人のモデルが存在しない学生にとっては、「影響を受けた人はいない」という自分自身のみに関じた理由であり、仕事をする理由も「自分自身のために働く」という意味合いが強くなるものとも考えられる。

4. 働く人のモデルの有無と卒業後の進路との関連

進路目標の決定状況(決定・拡散・未定)、過去一年間の準備・活動の有無、現状(第一希望内定決定・第一希望以外で内定決定・内定連絡待ち・内定未決定)のそれぞれについて、働く人のモデルの有無の4群(入学前後有、入学前有・後無、入学前無・後有、入学前後無)により違いが見られるかについて χ^2 検定により検討した。その結果、過去一年間の準備・活動の有無において人数比率の違いが有意($\chi^2(3)=20.39, p<.001$)であり、残差分析の結果、1%水準で、入学前後有群は活動を

行っている割合が高く、入学前後無群は活動を行っている割合が低いことが示された。進路目標の決定状況($\chi^2(6)=6.87, n.s.$)、現状($\chi^2(9)=7.32, n.s.$)については有意な違いは認められなかった。なお、入学前後有群での過去一年間の準備・活動をした人数の割合は78.0%であり、準備・活動をした具体的な内容(複数回答あり)の割合は、1) 資料請求45.0%、2) 専門学校に通う0.0%、3) 職場訪問32.5%、4) 資格・検定取得40.0%、5) 採用試験を受験15.0%であった。

これらの結果から、働く人のモデルが入学前から続いて存在する場合に、準備・活動という部分に積極的な影響を与えることが示唆された。ただし、準備・活動をした具体的な内容から、就職に向けた資料請求や資格・検定取得は40%程度の学生が行っているものの、実際の行動がともなう職場訪問は30%程度に下がり、さらに就職に直結する採用試験受験はその半分の15%となっており、比較的初期の準備・活動に留まっていたともいえる。そのことも反映してか、現状については有意な差が認められず、実際の内定には結びついていないといえる。

なお、現状におけるそれぞれの割合は全体で、1) 第一希望内定決定11.3%、2) 第一希望以外で内定決定0.9%、3) 内定連絡待ち8.5%、4) 内定未決定79.2%であった。本調査の時期は1月終わりであり、最終的に3月末の卒業時には8割程度の就職率であったことから、現状については調査時期の問題で十分に実状を反映できなかった可能性が考えられる。2月から3月にかけて急に就職が決定するのは、私立の幼稚園や保育園が職員の流動性が比較的高く、求人が新年度を控えたこの時期に集中する現状が存在するようである。本調査の結果は、その意味で「内定を決めた学生が1割程度である時期」の状況であると限定する必要があるかもしれない。

5. 働く人のモデルの有無とその他の尺度との関連

働く人のモデルの有無とその他の尺度との関連については、過去一年間の準備・活動の有無での結果が有意であった「入学前後有群」と「入学前後無群」に特に着目し、各尺度での比較を行った。

まず、統計的検定の結果、入学前後有群と入学前後無群間で有意または傾向差となった尺度について述べる。1) 職業レディネス尺度[問8]では、 t 検定の結果($t(67)=2.03, p<.05$)、入学前後無群(平均15.1, $SD=2.0$)よりも入学前後有群(平均16.2, $SD=2.1$)の方が有意に得点が高く、職業レディネスが高いことが示された。項目合計の平均値を見ると、いずれも15(ややあてはまる)以上であり、両群とも職業レディネスがある方向にあることがわかる。さらに、入学前も後も働く人のモデルが存在する学生は、入学前も後も働く人のモデルが存在しない学生に比べて、職業に対するレディネスが高いことが示されたといえる。これは、働く人のモデルの存在が職業に対する目標や責任を明確にさせ、理解や関心を深めるように影響を及ぼしたと考えられる。

2) 卒業後の進路を考慮して大学・学科を選択したか[問16-3]については、 t 検定の結果($t(67)=2.08, p<.05$)、入学前後有群(平均4.3, $SD=0.9$)の方が入学前後無群(平均3.8, $SD=1.3$)よりも有意に得点が高いことが示された。両群の平均値を見ると、いずれも3(どちらともいえない)以上であり、両群とも進路を考慮した方向にあることがわかる。さらに、入学前も後も働く人のモデルが存在する学生は、入学前も後も働く人のモデルが存在しない学生に比べて、卒業後の進路を考慮して大学・学科を選択したことが示されたといえる。これは、働く人のモデルの存在が目標とする職業を明確にさせ、それに至る過程としての大学・学科をより考慮しての選択になったと考えられる。

3) 進路を決める上で大学・学科の講義・演習科目の内容が役立ったか[問16-4]については、 t 検定の結果($t(67)=1.88, p<.10$)、入学前後有群(平均4.6, $SD=0.6$)の方が入学前後無群(平均4.2, $SD=0.9$)よりも得点が高い傾向が示された。両群の平均値を見ると、いずれも4(どちらかという役立つ)以上であり、両群とも役立つという方向にあることがわかる。さらに、入学前も後も働く人のモデルが存在する学生は、入学前も後も働く人のモデルが存在しない学生に比べて、役立つと思ったことが示されたといえる。これも、働く人のモデルの存在が目標とする職業を明確にさ

せ、それに直結する講義や・演習科目がより役立つものとして認識されたことが考えられる。

次に、統計的検定の結果、入学前後有群と入学前後無群間で有意ではなかった尺度について述べる。1) 進路選択に対する自己効力感尺度[問9]、2) 大学での学生生活の満足度[問16-6]、3) 大学・学科に対する総合的な満足度[問16-7]については、それぞれt検定の結果、入学前後有群と入学前後無群間で評定平均値に有意な差はなかった。

1) 進路選択に対する自己効力感尺度については、両群の項目合計の平均値がそれぞれ20点満点のうちの12点程度(入学前後有群:平均12.7, SD=2.9; 入学前後無群:平均12.1, SD=2.8)であり、自信がある方向にあるとはいえるが、両群で差は認められなかったといえる。進路選択に対する自己効力感尺度が群間で有意とならなかったのは、入学前後有群においてレディネス(準備性)は高まったものの、それが自己効力感とはつながっていなかったことを示すものである。これまでの研究(廣瀬他,2004;高良他,2004)では、自己効力感尺度はレディネス尺度と同様な結果となることが多く、今回の結果はこれまでとは異なる結果であった。先に入学前後有群で過去一年間の準備・活動がより行われていたものの、内容的には比較的初期の準備・活動に留まっていたことが示されたが、そのようなまだ積極的には動いていないことが自己効力感の高まりに結びつかなかったことと関連があるように思われる。

2) 大学での学生生活の満足度(入学前後有群:平均3.8, SD=0.9; 入学前後無群:平均3.6, SD=0.8)、3) 大学・学科に対する総合的な満足度(入学前後有群:平均3.8, SD=0.8; 入学前後無群:平均3.7, SD=1.1)は、いずれも平均値が3(どちらともいえない)以上を示しており、両群とも満足な方向であったといえる。大学での学生生活や総合的満足度は、複合的な要因が関係しており、今回検討している進路に関する事柄はその1つの要因であり、総合的な判断ではその影響は少なかったとも考えられる。

さらに、3) アルバイト経験の有無[問10]、4) 来年の生活費の心配[問11]、5) 家計を助ける必要性[問12]、6) 就職を世話してくれる人の有無

[問13]、7) 大学生生活で最も打ち込んだこと[問16-5]については、それぞれ χ^2 検定の結果、入学前後有群と入学前後無群間で有意な人数比率の違いはなかった。就職に関わる要因として、「アルバイト等で仕事の経験がある」「生活費や家計の問題がある」「就職を世話してくれる人がいる」「大学で何に打ち込んだか」などが存在すると考え、これらの項目を作成したが、働く人のモデルの有無という観点からは、これらの要因との関連は見られなかったといえる。

6. まとめ

本調査では、働く人のモデルの有無が短期大学生の進路に及ぼす影響を明らかにするため、保育士、幼稚園教諭を日指す学科に所属する短期大学2年生(最終学年)を調査対象者として検討した。その結果、1) 半数近くの学生が入学前も入学後も働く人のモデルが存在した。働く人との間柄は「教師」が最も多く、職業としては「保育士」が最も多かった。2) 大学入学前に働く人のモデルが存在した場合、より専門志向の理由で入学しており、大学進学の原因が形成されるまでに教師に影響を受けた学生が多かった。逆に、入学前にモデルが存在しなかった場合は、大学進学理由が形成されるまでに友人に影響を受けた学生が多かった。3) 大学入学後に働く人のモデルが存在した場合、自分自身のみならず、社会にも目を向けた仕事をする理由となっており、その理由が形成されるまでに父親に影響を受けた学生が多かった。逆に、入学後に働く人のモデルが存在しなかった場合は、仕事をする理由の形成に際して影響を受けた人はいなかった。4) 進路目標の決定状況(決定・拡散・未定)、過去一年間の準備・活動の有無、現状(第一希望内定決定・第一希望以外で内定決定・内定連絡待ち・内定未決定)では、働く人のモデルの存在が入学前から続いて存在する場合に、準備・活動という部分に積極的な影響があったことが示唆された。ただし、準備・活動をした具体的な内容から、比較的初期の準備・活動に留まっており、そのことが反映してか、現状については有意な差が認められず、実際の就職の内定には結びついていなかった。5) 働く人のモデルの存在が入学前から続いている場合、職業レデ

ィネスが高く、卒業後の進路を考慮して大学・学科を選択しており、また、大学・学科の講義・演習科目の内容が役立ったと評価していることが示された。

ところで、本調査の調査対象者は、1) 廣瀬他(2004)の分類では「単一型」に属しており、2) 短期大学であることから、2年間の集中したカリキュラムが組まれており、3) 大学自体は男女共学であるが、女性の比率が高く、今回は女性のみデータであったことが特徴として挙げられる。本調査では、できるだけ対象を限定し、同質な集団の中で、働く人のモデルの存在の影響を検討してきた。そのため、今後の課題としては、この結果がどれだけ一般化できるのかについての方向の検討も必要であろう。具体的には、1) 廣瀬他(2004)の分類では「多様型」での調査、2) 4年制大学での調査、3) 男性を対象とした調査などが考えられよう。

また、本調査の問題点として、調査時期のことが挙げられる。結果的に、まだ大半の学生の就職が決定していない状況での調査となってしまう、現状については調査時期の問題で十分に実状を反映できなかった可能性が考えられる。今後は、対象となる大学、学部、学科でどのような就職決定のパターンがあるかを十分把握した上で、調査期日の設定を行う必要があると思われる。本調査では、調査時期の問題から、働く人のモデルの有無と卒業後の進路との関連が十分に解明されたとは言いがたい。今後の研究では調査時期の適切化によって、この問題の解明をさらに進めることが必要であろう。

付 記

本研究の一部は、日本教育心理学会第47回総会(2005)において発表された。

引用文献

- 淵上克義 (1984a). 進学志望の意志決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
 淵上克義 (1984b). 大学進学決定に及ぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
 廣瀬 等・高良美樹・金城 亮 (2004). 大学新入

生の学部・学科選択と就業意識に関する研究—学部・学科種別による比較検討— 琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学, 13, 241-266.

- 金城 亮・高良美樹・廣瀬 等 (2004). 大学・短大最終学年学生の就業意識に関する研究 I 日本教育心理学会第46回総会論文集, 415.
 文部省 (1996). 平成6年度 学校教育と卒業後の進路に関する調査報告書 大蔵省印刷局
 小川一夫・田中宏二 (1980). 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.
 桜井茂男 (1991). 教育学の学生が大学で学ぶ動機・理由と社会的不適応の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, 27, 123-130.
 高良美樹・金城 亮 (2001). インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として— 琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学, 8, 39-57.
 高良美樹・金城 亮・廣瀬 等 (2003). 沖縄県の大学生における就業意識についての基礎的研究 琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学, 11, 331-357.
 高良美樹・金城 亮・廣瀬 等 (2004a). 大学・短大最終学年学生の就業意識に関する研究 II 日本教育心理学会第46回総会論文集, 416.
 高良美樹・金城 亮・廣瀬 等 (2004b). 沖縄県の大学生・短期大学生における就業意識についての基礎的研究(2) 琉球大学法文学部人間科学紀要 人間科学, 13, 203-221.
 田中宏二・小川一夫 (1982). 教師職選択に及ぼす親の影響—子の認知した親の期待と職業モデル— 教育心理学研究, 30, 257-262.
 浦上昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 42, 115-126.
 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983). 職業レディネスと職業選択の構造—保育系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連— 名古屋大学教育学部紀要, 30, 63-9.

付録 質問紙の調査項目

問1. あなたが大学に進学しようと思ったのは、どのような動機(理由)からでしたか。入学時のことを思い出して、それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を1つだけ選んで、数字に○印をつけてください。

	まったくあてはまらない	ややあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	非常にあてはまる
1 専門的な知識や技術を身につけたかったから	1	2	3	4	5
2 自分の希望している職業に必要な資格を取りたかったから	1	2	3	4	5
3 大学を出た方が就職や就職後の昇進に有利だと思ったから	1	2	3	4	5
4 まわりのみんなが大学に進学したから	1	2	3	4	5
5 大学の学生生活を楽しまたかったから	1	2	3	4	5
6 大学に進学してから、自分に合った職業を考えたかったから	1	2	3	4	5
7 先生がすすめたから	1	2	3	4	5
8 家族がすすめたから	1	2	3	4	5
9 大学に進学するのは当然だと思っていたから	1	2	3	4	5
10 まだ就職したくなかったから	1	2	3	4	5

問2. 進学に対する、問1で回答したような動機が形成されるまでに、主にどのような人から影響を受けたと思いますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 教師 2 父親 3 母親 4 友人 5 小説やドラマなどの登場人物
 6 その他 (具体的に記入:) 7 影響を受けた人はいない

問3. あなたには、大学入学前に「将来こんなふうになりたい」という「働く人のモデル」がいましたか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

1. 働く人のモデルの有無 : 1 いた 2 いなかった (次の【問4】に進む)

2. 働く人との間柄: (下の1~12の中から、1つ選んで番号に○印をつけてください)

- 1 教師 2 父親 3 母親 4 兄弟・姉妹 5 親戚
 6 友人 7 友人の親、兄弟 8 学校の先輩 9 親の知り合い
 10 近所の人 11 小説やドラマなどの登場人物 12 その他 ()

3. 働く人の職業： (下の1～5の中から、1つ選んで番号に○印をつけてください)

- 1 保育士 2 幼稚園教諭 3 公務員 4 一般企業 5 その他 ()

問4. あなたが卒業後、仕事をしようと思うのは、どのような動機(理由)からですか。それぞれの項目について、自分の気持ちにもっとも近い程度を1つだけ選んで、数字に○印をつけてください。

	まったく あてはま らない	やや あてはま らない	どちらとも いえな い	やや あてはま る	非常 にあて はまる
1 達成感を得るため	1	2	3	4	5
2 自分の能力や創造性を発揮するため	1	2	3	4	5
3 趣味や興味を仕事で実現するため	1	2	3	4	5
4 余暇や趣味に使うお金を得るため	1	2	3	4	5
5 職場の人々や顧客との交流のため	1	2	3	4	5
6 地域や社会に貢献するため	1	2	3	4	5
7 社会の一員として認められるため	1	2	3	4	5
8 自分自身や家族の生活の糧を得るため	1	2	3	4	5
9 働かないのは世間体が悪い	1	2	3	4	5

問5. 仕事に対する、問4で回答したような動機が形成されるまでに、主にどのような人から影響を受けたと思いますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 教師 2 父親 3 母親 4 友人 5 小説やドラマなどの登場人物
6 その他 (具体的に記入：) 7 影響を受けた人はいない

問6. あなたには、大学生になってから「将来こんなふうになりたい」という「働く人のモデル」がいますか(大学入学前から継続している場合も含む)。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

1. 働く人のモデルの有無 : 1 いる 2 いない (次の【問7】に進む)

2. 働く人との間柄： (下の1～12の中から、1つ選んで番号に○印をつけてください)

- 1 教師 2 父親 3 母親 4 兄弟・姉妹 5 親戚
6 友人 7 友人の親、兄弟 8 学校の先輩 9 親の知り合い
10 近所の人 11 小説やドラマなどの登場人物 12 その他 ()

3. 働く人の職業： (下の1～5の中から、1つ選んで番号に○印をつけてください)

- 1 保育士 2 幼稚園教諭 3 公務員 4 一般企業 5 その他（ ）

問7. あなたは、現在の専攻・専門と就職との関係についてどのように考えていますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 ぜひとも専攻・専門と関連のある仕事につきたい
- 2 なるべく専攻・専門をいかせる仕事につきたい
- 3 就職のときはいかせなくても、将来は専攻・専門と関連のある仕事につきたい
- 4 現在の専攻・専門と就職とは関連しなくてよい
- 5 その他（具体的に記入： ）

問8. 仕事についてのあなたの考えをおたずねします。次の各文について、あなたの考えにあてはまる番号に○印をつけてください。

	あま てっ はた まら ない	あや ては はや まら ない	やや あて ては まる	非 常に あて ては まる
1 自分は職業の上で将来の目標があるので、それを実現させるために自分でいろいろ考えてやっていく	1	2	3	4
2 自分の選んだ職業を通じて、自分にどれだけ力があるのか確かめてみることに、大きな関心をもっている	1	2	3	4
3 将来の職業のことについては、できるだけ考えないようにしている *逆転項目	1	2	3	4
4 自分が興味を持っている職業の内容は十分知っているため、就職のためにどのような条件が必要であるかはよくわかっている	1	2	3	4
5 自分の職業は自分で選び、その選択に対して自分で責任を負う必要がある	1	2	3	4

問9. 次の各文について、あなたはどれくらい自信がありますか。あなたの自信の程度にあてはまる番号に○印をつけてください。

	自 ま 信 が た な く い	自 や 信 が や な い	自 や 信 が あ る	自 非 常 に あ る
1 自分の将来設計にあった職業を探すこと	1	2	3	4
2 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと	1	2	3	4
3 自分の理想の仕事を思い浮かべること	1	2	3	4
4 自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること	1	2	3	4
5 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること	1	2	3	4

問10. あなたは、在学中にアルバイトをしていましたか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 アルバイトをしていた 2 アルバイトをしていない

問11. 卒業後すぐに就職しなくても、来年度の生活費は大丈夫だと思いますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 大丈夫ではない 2 どちらかといえば大丈夫でない 3 どちらかといえば大丈夫
4 十分大丈夫 5 その他 ()

問12. 卒業後すぐに就職して、あなたが家族の家計を助ける必要性はどれくらいあると思いますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 必要ではない 2 どちらかといえば必要でない 3 どちらかといえば必要である
4 非常に必要である

問13. もし、あなたが卒業後の進路を決めないうまま、卒業して社会に出た場合、就職先を世話してくれる家族や知り合いはいますか。あてはまるものを1つ選んで番号に○印をつけてください。

- 1 いる 2 いない 3 わからない

問14. 卒業後の進路に関して、以下の①～③の各質問について、あてはまる数字に○印をつけてください。

質問①：卒業後の進路	質問②：過去一年間の準備・活動	質問③：現 状
1 一つに決めている 2 やりたいことがいろいろあって一つに決められない 3 やりたいことが見つからない(未定)	1 進路のための準備・活動をした 具体的におこなった活動に全て○印 1 資料請求 2 専門学校に通う 3 職場訪問 4 資格・検定取得 5 採用試験を受験 6 その他 () 2 進路のための準備・活動をしていない	1 第一希望内定決定済み 2 第一志望以外に内定決定 3 内定連絡待ち 4 進路未決定

問15. 上の問14①で進路を「一つに決めている」を選んだ方だけにおたずねします。(それ以外の方は、問15は回答せず、【問16】に進んでください)

15-1. 具体的にはどのような進路を決めていますか。[以下の項目で該当する数字を1つ○で囲む]

- 1 保育士 2 幼稚園教諭 3 公務員 4 一般企業 5 進学(大学・専門学校)

- 6 留学 7 一時雇用・アルバイト 8 その他 (具体的に：)

15-2. その進路に進むことを決定したのは、いつ頃ですか。

- 1 大学入学以前 2 大学1年のとき 3 大学2年のとき 4 その他 ()

15-3. あなたが所属する学科で学んだことは、あなたの就職・採用内定に役立つ (役立った) と思いますか。

- 1 全く役立たない 2 どちらかというと役立たない 3 どちらともいえない
4 どちらかというと役立つ 5 非常に役立つ

問16. 最後に、あなた自身のことについておたずねします。該当する数字を1つ○で囲むか、カッコ内にあてはまる答えを記入してください。

1 あなたの年齢： () 歳

2 あなたの性別： 1 男 2 女

3. あなたはこの大学・学科を選択する際、卒業後の進路を考慮して選択しましたか。

- 1 全く考慮しなかった 2 どちらかというと考慮しなかった 3 どちらともいえない
4 どちらかというと考えた 5 非常に考えた

4 あなたはこの大学・学科の講義・演習科目の内容が、進路を決める上でどれくらい役立つ (役立った) と思いますか。

- 1 全く役立たない 2 どちらかというと役立たない 3 どちらともいえない
4 どちらかというと役立つ 5 非常に役立つ

5 あなたの大学生生活を振り返って、最も打ち込んでいたのはどのような活動ですか。

- 1 専門・専攻に関する勉強 2 専門・専攻以外の勉強 3 サークル・趣味
4 ボランティア 5 友達づきあい 6 恋愛 7 アルバイト
8 その他 ()

6 あなたはこの大学での学生生活に、どの程度満足していますか。

- 1 非常に不満 2 やや不満 3 どちらともいえない 4 やや満足 5 非常に満足

7 総合的にみて、あなたは大学・学科に、どの程度満足していますか。

- 1 非常に不満 2 やや不満 3 どちらともいえない 4 やや満足 5 非常に満足